

◆特集 全国に広がる「ペンライトデモ」

緊急スタンディングへ無党派層も

今年の3月末頃より、「戦争反対！ 憲法守れ！」の運動が各地で行われるようになりました。私の地元・川越でも4月以降、国会の「19日抗議行動」に呼応して「緊急スタンディング」をやっています。

2025年2月の衆院選で右派ポピュリズムの手法を使った自民党高市政権が圧勝し、社会運動を担ってきたものはしばらく茫然自失状態でした。しかし、「戦争をする国づくり」に邁進する高市政権の動きに、こうしてはいられないとやっと動き始めた時期に、2月末のイラン戦争が重なりました。「国際法など意味がない」と公言するトランプ大統領の「とんでもない」戦争に、「法的評価は差し控える」としか言えない高市首相、この「とんでもない」反応に、我慢しきれないで無党派層もまた、この頃、動き始めたのだろーと思えます。これま

戦争反対！ 9条守れ！ の新しい市民運動

「戦争はいらない！緊急アクション@川越」呼びかけ人 **出口 研介**



での「運動圏」の外にいた人々が、外交・軍事・経済のすべてに「米国一辺倒でいいのか」という疑問を受け止めるようになっていました。「お花畑」にすぎないと言われていた「平和憲法」は、実は戦争への動きを止める働きをしているのではないのかという声に賛同する人々も増えてきていました。もちろん、その背後には、富の格差拡大と気候危機を止められない現代資本主義の矛盾は深化するばかりであり、人々の現実の生活苦と未来へのどうしようもない不安は拡大するばかりだという重い現実がありました。

国会前の「平和憲法を守るための緊急アクション」の参加者は、3月10日は8000人、3月25日は2万4000人、そして4月8日には3万人と次第にふくれあがっていました。安保法制反対運動の頃から途絶えていた「1万人」を超える国会前抗議活動が復活していました。「三文払って、二度寝の会」「家の布団で寝てた

い同盟」「もんぺは嫌だ、着物が着隊!」「道ばたの猫に声かける労働者の会!」などというユーモアたっぷりな「架空幟旗」をひらめかせて抗議活動に参加するグループが増えており、コールもラップ調で、明らかに、これまでの「運動圏」の人々の発想ではない運動が広がっていました。

陽気に、元氣よく、大声を上げて、ペンライト

私たちが、国会に呼応して地元でも「緊急アクション」をやるうと考えたのは3月末のことです。言い出した時はたったの二人。4月4日の「さようなら原発川越の会」の集会終了後に「残って下さい! 話しがあります!」と呼びかけると、デモ参加者はとてもいい反応で応えてくれました。「国会に行けない者も多いから賛成!」と。提案者の二人は、即座に「日時と場所、集会名称」を提案し、「戦争はいらない!緊急アクション@川越」の活動がはじまりました。恒例の「さようなら原発」隔月デモが、コロナ前の水準の半分程度の20人台に落ち込んでいましたから、呼びかけた当初は、50人を超えればいいなと思っていたのですが、なんと、4月は日曜日だったこともあり270名、5月は180名、

6月は184名と、高水準の参加者をキープしています。この数字は地元では「驚異的」です。

呼びかけ人を5人の体制にして、準備の会議をきちんとやるようにしていますが、広がりを作ってくれているのは、紙の媒体よりはXの「デモ・カレンダー」と参加者各個人のラインです。「それぞれ自分のライングループに知らせて下さい。」と呼びかけています。

スピーチは20歳代から、70歳代まで、老若男女取り混ぜてお願いするようにしています。コールも、通常のコールに加えて、「武器を買うより、猫を飼え!」という「猫バージョン」を用意したり、タンバリンと鍋を叩いての「ええじゃないか」を入れたりしています。地元のコーラスグループに歌をお願いしてアクションを盛り上げることも忘れないようにしています。陽気に、元氣よく、大声を上げて、ペンライトを振ろうと呼びかけています。

「どこにも所属していませんが、参加していいですか?」と言いながら参加してくれる方が毎回います。飛び入りで参加してくれた高校生が次の会にも来てくれるということも起っています。これまで一人スタンディングを実行していた40歳代の男性は、私たちと合流してくれてマイクを握ってくれるようになっていきます。

◆特集 全国に広がる「ペンライトデモ」



「戦争はいらない！緊急アクション@川越」のペンライトデモ風景 川越駅東口にて

「一人でやっていたのは強いからではないんです。弱い自分でもやれることをやるよりないと思っていたからです」と。確かに、新しい風が吹いていることを感じるこ
とができる運動になっています。

アンガージュする社会運動へ

もちろん課題もあります。その一つは、国会前に比較すると、若い世代の参加がまだまだ足りないこと。二つには、この各地の動きをどう横に繋いでいくのかという点。そして三つに、この運動を途切れさせないで、そう遠くない先にくる「憲法改正」の動きに抵抗できる力にするには、もう一段階運動のレベルが上がらないといけないという点です。

組織的でない運動は組織活動にない強さを持っていますが、潮が引くとしぼんでしまうという弱さも持っています。運動の高揚をキープすることに努力しながら、組織的なリアルな社会運動がこの波にどうアンガージュ（政治や社会活動に積極的に参加すること）し、どう回収していくのかという視点も頭に置きながら、この運動の真ん中で暫く仕事をしていこうと思っています。

（でぐち けんすけ）